

## 『思いや考えを大切にし、自分たちで折り合いを付けながら合意形成に向かう』姿

### 議題 本時のねらい

『第2ステージがんばったね会』をしよう  
「第2ステージがんばったね会」を楽しくするために友達の意見を聞いたり自分の意見を発表したりして、みんなで楽しめる遊びを考えることができる。

### 本時の授業について

沢口先生は、学級活動(1)の話合い活動を学級経営の中心に据え、子どもが主体となって話し合う活動を意識しています。これまでの議題は、「学級目標を決めよう」「給食の時間をもっと楽しくしよう」といった学級全体に関わる内容で、議長・書記・記録などの話合い活動を進める役割については、輪番制で全員が経験できるよう計画してきました。

本時は、子どもから出された意見を基に、冬休み前に「第2ステージがんばったね会」と題したお楽しみ会の内容を定める時間です。これは、短期的な目標の「ここにこマーク 30 個」の達成をクラスの全員で祝う催しです。子どもは、楽しみたい遊びや、なぜその遊びを選んだのかという理由を学級会ノートに記入し、積極的に話合い活動に参加しました。

子どもは、みんなで楽しめる遊びについて、今までの経験や思いを基に、多様な意見を出したり友達の意見を受け止めたりしていきました。そして、それらの意見をよりよく改善したり、少数の意見を大切にしたりしながら、「第2ステージがんばったね会」の内容を話し合いました。

### 切実感をもって話し合うための「見える化」

議長は、学級会の始めに、クラス全員の努力が第2ステージの目標の達成につながったことを紹介しました。加えて、沢口先生は、写真や日記、掲示物などを使って努力している子どもについて話をしました。子どもの努力の姿を「見える化」したのです。子どもは、自分たちの姿が目標達成につながっていることを自覚していきました。そして、“みんなで努力し、目標を達成したからこそこの「がんばったね会」であることを子どもなりに感じ、話合いが始まりました。

議長の投げ掛けにより、前回の「お楽しみ会」で行われた遊びの様子や感想について、子どもは、語り始めました。話合いが進むにつれて、なぜその時の遊びがうまくいかなかったのか、どうして楽しめた人と楽しめなかった人が出てしまったのかなど、「問い」が生まれました。同時に“今回の「がんばったね会」は、前回の「お楽しみ会」とは違う会にしたい”という思いが高まりました。努力の「見える化」は、「第2ステージがんばったね会」を特別な会として成功させようという子どもの気持ちを高め、切実感をもって主体的に話し合う姿につながりました。



### 折り合いを付けていくための教師の関わり

会を成功させたいという気持ちが高まった子どもは、それぞれがやりたい遊びを発表しました。沢口先生はその様子を見て、議長に「なぜその遊びがいいのか、みんなに聞いてみたらどう」と、助言しました。それぞれの遊びには、それぞれのよさがあり、子どもがそのよさの理由を話す中にそれぞれの思いが表れ、その思いを出し合うことが話合いのポイントになっていくと考えたのです。

沢口先生の議長への関わりにより、子どもは、やりたい遊びの理由を出し合いました。その中で多かったのは「けいどろ」についてでした。「けいどろは、走るのが苦手な人はつまらなかったと思うよ」「でも、楽しかったって人もたくさんいるよ」「じゃあ、ルールを変えてみたらみんなで楽しめようだよ」など、“みんなで楽しめる”が、折り合いをつけるためのキーワードとなりました。子どもがお互いの思いや考えを尊重しつつ、みんなが納得できる遊びのルールを決めていこうとしたことが、合意形成に至りました。



### 支持的な風土を生み出す教師の認め励ます支援



議長の指示により、子どもは近くの人と話合いを始めました。少数にしたことで多くの子どもに発言の機会を与えることになりましたが、それでも自分の思いや考えを伝えることに消極的な子どももいます。

正和さんもその一人です。沢口先生は、正和さんにも自信を持って自分の思いや考えを伝えてほしいと思っていました。

香織さん：「私は『けいどろ』がいいな、みんなでできるでしょ」

沢口先生：「いいね、正和さんは、どんな遊びがいい？」

正和さん：「先生、僕も『けいどろ』。だって、つかまっても、助けてもらえれば、また逃げられるから」

沢口先生：「その考えとってもいいよ、まわりの友達に言ってごらん」

— 正和さんの発言後 —

沢口先生：「そうだね、正和さん、ありがとう。香織さんと同じ意見でも、正和さんが言ってくれたことで、香織さんの“みんなでできる”が分かりやすくなったね」

教師の認め励ます支援によって、周りの子どもも、正和さんの意見を認めていきました。

一人一人の思いや考えを大切にする教師の言葉や態度が学級内に支持的な風土を生み出します。そのことが、子どもの達成感や充実感、互いのよさの認め合い、自分のよさへの気づきにつながります。

### 事前、話合い、事後のサイクルの積み重ね

話合い活動では、「第2ステージがんばったね会」の内容が「けいどろ」と「へびへびじゃんけん」の二つに決まりました。その後、当日の係や細かなルールを決め、それぞれの係で準備を進めました。係決めの際には、多くの子どもが立候補しました。“みんなで楽しめる”という視点に沿って合意形成したことが、「僕たちが『けいどろ』のルールを紙に書くよ」などの積極的な姿勢につながりました。

会の実践後の感想には、「たくさん意見が出たのでみんなで楽しめる遊びになった」「しっかり用意できた」と、話合いの内容や準備について触れているものがありました。会と話合いをつなげて振り返り、学級通信で感想を紹介することで、「この次も楽しい会にしたい」という意欲が高まりました。学級通信を配ったその日の帰りの会は、自身の努力やお互いのよかったところを実感する時間となりました。

主体的な話合いになるように計画委員と打合せを行った事前指導、少数意見にも耳を傾け、互いの思いや考えを比べ、自分たちで折り合いを付けて合意形成に向かった話合い活動、そして事後の振り返りといったサイクルが、よりよい集団の醸成へとつながっていきました。

